
ポッキーゲーム

絶氷のシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポツキーゲーム

【Nコード】

N1658T

【作者名】

絶氷のシア

【あらすじ】

今回はムギちゃん視点で挑戦してみました。少々百合要素がありますので苦手な方・不快な方はご遠慮くださいませ。

「……っかんぱい」「……」

オレンジジュースの入ったコップを掲げて、みんなで乾杯をする。

本日は12月25日。

私たち桜校軽音部こと放課後ティータイムは唯ちゃんの家でクリスマスパーティーをするために集まっていました。

「ぶはあ〜！うめ〜！」

「お前はおっさんか……。ていうか一気飲み……」

すでにグラスが空のりっちゃん。

それをみて呆れてるのは澁ちゃん。

「あずにゃ〜ん、はいあ〜ん」

「ゆ、唯先輩！自分で食べますから！」

「うふふ、仲良しだね〜二人とも」

梓ちゃんにお菓子を食べさせようとしている唯ちゃん。

それを笑いながら見ている唯ちゃんの妹の憂ちゃん。

で、私はというと……

「りっちゃんいい飲みっぷり！もう一杯いる？」

「おう！わりいなムギ！」

空になったりっちゃんのコップにジュースをお酌してました

こういった友達同士の集まりは高校生になってから飛躍的に多くなったので、毎回とても楽しみにしています。

「おい律、あんまり飲みすぎるなよ？」

「いいじゃねーか、なあムギ」

「そうよね〜、りっちゃん」

ため息をつきつつもやれやれとした表情で微笑んでいる澁ちゃん。なんだかんだ言ってもやっぱり優しいのよね。

「にしてもやっぱり美味しいな、憂ちゃんの料理は」

「ありがとございます、澁さん」

テーブルの上には所狭しとお菓子の他に憂ちゃんも腕によりをかけて作った料理もたくさん乗っていました。

私もどれから手をつけたらいいか迷ってしまいます。

「とりあえず取り皿を用意しましたので、皆さん一枚ずつ持つてください」

台所から戻ってきた憂ちゃんは人数分の取り皿を持ってきてくれました。

やっぱりよくできた子だと思います。

みんなは取り皿を持ち、各自各々で料理をお皿に持っていきます。

「よし、んじゃ今からプレゼント交換でもするか？」

タイミングを見計らっていたのが、りっちゃんは取り皿に料理を取り終わるのを確認してからみんなに確認します。

「「「「「さんせーい」「」「」

みんなで賛成の一言。

「ちよつと待ったああああ！」

とここで聞き覚えのある声。

見るとりっちゃんと澪ちゃんの間放課後ティータイムの顧問こと山中さわ子先生が座っていました。

「「いたのかよっ!?!」「」

りっちゃんたちは驚いて身を引いてのけぞっています。

でも最近はこちらも慣れた展開のような気が…

「あ、先生。これ先生の分のジュースと取り皿です」

「あら？気が利くわねえ憂ちゃん」

憂ちゃんからコップとお皿をもらい、料理を盛っていく先生。

「でさわちゃん？何が待ったなの？」

興味津々で待てなかったのか、唯ちゃんがコタツから身を乗り出して聞きます。

待ってましたとばかりに先生は眼鏡をかけ直しながら答えます。

「うふふ、今回の私はひと味違うわ！なんてっ たってこれを準備してきたんだから！」

さわちゃんが勢いよくテーブルの上に用意してきたものを置きます。よく見てみると、割り箸のようでした。

でもみんな意図が掴めていないようです。

梓ちゃんが先生に聞きます。

「これお箸ですか？なんのために？」

「んもう！本当にわからない？これで遊べるゲーム」

私は置かれたお箸をよく眺めます。

見ると、先の方に数字が書かれていました。一本だけは赤く塗ってあります。

これはいったい？

「もしかしてさわちゃん、王様ゲームか？」

「さすがりっちゃん 鋭いわね！」

王様ゲーム？

聞いたことない言葉に私は頭を傾げます。

「もしかしてムギ先輩、知らないんですか？」

「ええ…」

お箸で王様ゲーム？

とても結びつけられません。

「簡単に説明しますと…」

つまりはこのようです。

この番号のふつであるお箸をランダムに引き、割り振られた番号の人に赤印を引いた王様が命令する、というゲームだそうです。

「まあ定番といえば定番だな」

「でしょでしょ？ 澪ちゃんもそう思うわよね」

「やろっやろっ」

コップの中にお箸を入れ、混ぜたらみんなと一緒に引く。

どうやら最初は王様以外の番号は伏せるみたいなので、王様は誰か

しかわからないそうです。

最初の王様は…

なんと私でした。

「あ 私だわ」

「お！初ゲームで初キングか！」

え〜と、この次は適当な順番としてほしい事を言っただけですよ。じゃあ…

「2番の人と3番の人がポツキーゲームをやってもらいます」とりあえず最初はこんな感じで進めたいと思います。

意外とみんなの反応は

「定番ぽいー」

でしたので少しホッとしています。

「私2番だー」

「私3番です」

2番 唯ちゃん

3番 憂ちゃん

こ、これは…

もしかしたら…

姉妹でチュウしちゃうかも…

このあとの展開に少しだけ心が踊ってしまいます。

「ちなみにポツキーは先生が用意したわ」

「なんで持ってたんだよ…」

「こんなときのためによ！」

なぜだかわからないけど先生はポツキーをポケットから取りだし、唯ちゃんたちに渡します。

一本だけ抜き取り、唯ちゃんが口にくわえます。

「な、なんだかドキドキしちゃっな…」

憂ちゃんはちよっぴり頬が赤く染まって恥ずかしそうです。

可愛い〜

そして憂ちゃんが唯ちゃんの反対に座ってポツキーの先をくわえて

準備万端。

「それじゃスタート！」

ポリッ…ポリッ…

どちらからともなくくわえたポツキーを食べていき、姉妹の距離が
どンドンと縮まっていきます。

「わぁ…」

「これは…」

顔を手で覆いながらも目の部分はきちんと開いているりっちゃんと
澪ちゃん。

ポリッ…ポリッ…

あと十数センチ。

ポリッ…ポリッ…

あと数センチ。

ポリッ…ポリッ…ポキンッ！

「あーんおいしい！」

「おしかったね〜お姉ちゃん」

あと数センチというところでポツキーは音をたてて折れてしまいま
した。

「んじゃあ次だな」

みんなは自分のお箸をコップに戻し、またみんなはお箸を引きます。
次の王様は…

唯ちゃんでした。

「おお〜 私だ」

「んじゃ唯、命令してくれ」

唯ちゃんは顎に人指し指を当て、考えるような仕草をしました。
そして思い付いたように両手を合わせます。

「さっきのポツキーゲームが面白かったので、今度は5番と1番の
人にやつてもらいま〜す」

言われて自分の番号を確認します。

私は…1番。

「あ、私5番だ」

5番は澪ちゃんのようにでした。

「じゃあ私とね、澪ちゃん」

「ああ」

澪ちゃんは平静を保っているように見えて、さっきの憂ちゃんより顔が赤いような気がします。

こちらもかわいい〜

私がポツキーを一本抜いて口にくわえ、澪ちゃんに向けます。

すると澪ちゃんがおずおずとした感じで私の反対側をくわえました。

「んじゃスタート!」

ポリッ…ポリッ…

始まると同時に私と澪ちゃんの距離が縮み始めました。

けれど澪ちゃんはあまり進んでいないようです。

私の方はサクツと小気味いい音をたてて軽快に進んでいきます。

ポリッ…ポリッ…

「わあ〜、わ、私たちってあんな恥ずかしいことしてたんだね…」

「う、うん…」

としゃべっているのは唯ちゃんと憂ちゃん。

そんなに恥ずかしかったのね〜。

ポリッ…ポリッ…

そんなことを考えているうちにも距離はどんどん縮んでいきます。

ポリッ…ポリッ…

あと十数センチ。

ポリッ…ポリッ…

あと数センチ。

そこで澪ちゃんの動きが止まります。

それはなぜか。

あと一口でも進めば私と澪ちゃんの口が接触するからです。

回りのみんなもドキドキしながら私たちを見ています。

澪ちゃんは少し涙目で私を見つめていました。

…かわいい

そこで私は自分から動くことに。

ポリッ…ちゅ。

「んっ!？」

ついに私と澪ちゃんの唇が重なりました。

回りからは歓声と黄色い悲鳴。

澪ちゃんは放心状態にあるみたいで。

私は澪ちゃんの腰のあたりに手を回してしばらくの間その体制を保つていました。

ふと。

辺りを見渡すと、先ほどまで一言も発していない二人がいました。

デジカメを回してる先生。

後ろから覗く梓ちゃん。

「やだっ 先生撮ってたんですか？」

「うふふっ 澪ちゃんとムギちゃんのキスシーン、いただきました」

「すっ、すごいです先輩方」

決めポーズのような構えをとる先生。
と。

私の腕の中の澪ちゃんがぴくりと反応しました。

そして先生に目を向けます。

「…先生」

「な、なにかしら？」

「そのデジカメをくださあああああいつ!!」

「きゃああああっ! いやあああああ!」

ものすごい勢いで先生を追いかけていく澪ちゃん。

まるで阿修羅のような形相でした。

どうやら二人は平沢家から出たみたいで。

こうしてクリスマス会からデジカメ争奪戦になりました。

おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1658t/>

ポッキーゲーム

2011年6月3日05時06分発行